

面談冒頭に総代の文榮さんから、大正七年十一月改正の『乃木神社宝物・貴重品台帳』（前号参照）を拝見させていただいた。

▷宝第五十六号「長靴」一足、寄贈者塚田清市氏、大将ノ意匠ニ係ル左、右ナシ。

▷宝第五十七号「短靴」一足、寄贈者同ジ、大将ノ意匠ニ係ル左、右ナシ。

台帳には長短各1足ずつが登録されていたが、現実には長靴2足、短靴（サイドゴア、ショートブーツ 黒キッド）3足、計5足が収蔵されていた。靴はなぜか、全て塚田清市氏の寄贈である。

今回の調査で、塚田清市氏なる人物は、陸軍歩兵大佐、乃木將軍の遺産処分委員の一人であったことが判明した。將軍の副官でもあったのであろうか。

靴業界ではむかしから、京橋の伊東靴店（創業者伊東金之助、元桜組銀座出張店職

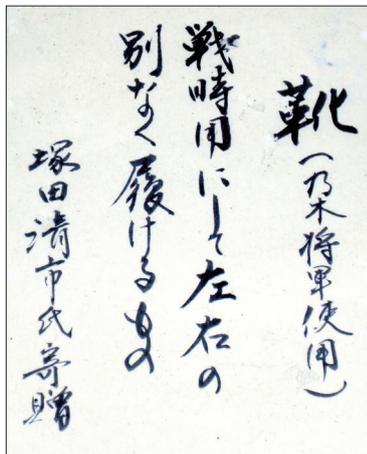
長）が、乃木將軍の左右のない靴を、特注でつくった、という話は有名である。

ブーツなどには、着用時に便利なよう、履き込み口の前後に、革または織ネームのテープが取り付けられている。その辺りで、生産者名が分かるかと期待していたが、残念ながら、それを証明するものはなかった。

水に浸した綿布を堅く絞り、やさしく手早く、靴の表面を拭き清めることから清掃作業は始まった。

左右なしの長靴（写真右端の靴参照）は、皮革を形成する組織がボロボロで、油性クリームでは押さえ切れない劣化状態だったので、クリームの塗布は断念した。

砂漠で水を得たように、生氣を取り戻した4足の靴は、奮闘した6時間半を忘れさせる輝きで、まさに至福の刻であった。



※前号の「靴の歴史散歩」^⑫で、株式会社コロンプス 企画部 小高さんのお名前を間違えてしまいました。正しくは、小高慎吾さんではなく、小高公次さんです。おわびして訂正いたします。